

S u m m e r S T O R Y

京四郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【今作はSummer PocketsとCLANNADという、Keyの2作品のクロスオーバーとなっております。】

珍しく長期休暇が取れた岡崎朋也。

彼はせっかくの長い休みを生かし、愛する家族と共に、旅行に出る事を計画する。

その行先は……瀬戸内海に浮かぶ島、鳥白島。

一方、その鳥白島では、民宿「加藤家」を経営する鷹原羽依里とその妻子が、長期滞在予定の、子供連れの一家三人の宿泊客を迎える準備に追われていた。

長閑で何処か懐かしい、内海の島を舞台に、二つの家族が織り成す、ひと夏の物語が始まる……

目次

Summer STORYのプロローグ	1
第一話　～到着（1）～	6
第二話　～到着（2）～	9
第三話　～到着（3）～	13
第四話　～馴れ初め～	18
第五話　～朝の一幕～	22
第六話　～チャーハン・ラプソディ～	27
第七話　～鳥白島の看板娘（1）～	32
第八話　～鳥白島の看板娘（2）～	35
第九話　～鳥白島の看板娘（3）～	38

Summer STORY〜プロローグ〜

——Side:C——

あるアパートの一室で、親子三人がテーブルの上に広げられていた数枚のパンフレットを眺めていた。

「沢山もらって来ちやいましたけど、どうしましょうか……」

「まあ、全部行かなきゃいけない訳じゃないからな。良さそうなどころを選ぼう」

「そうですね。せっかくの旅行ですから良い所を選びましょう!」

少し興奮気味に、上気した顔に笑顔を浮かべ、勢い込んでそう言う妻を見ていた夫の頬が、自然と緩む。

夫の仕事はなかなか纏まった休みが取れない職種ではあるが、家族の為に人一倍真面目に働くその姿を見続けていた上司や先輩・同僚達が、たまには家族と息抜きをと、彼の分の仕事をそれぞれが分担して受け持つ形で作ってくれた、そんな色々な人の想いの詰まった長期休暇である。

そして何より彼自身が、普段支えてくれている大切な妻と、その妻との間に儲けた、同じくらい大切な娘の為にと提案した旅行。

それを、計画の段階からここまで楽しんでくれているのは、彼にとってはそれだけでも幸せな事だった。

「パパ、これ、なんてよむの?」

「ん?どれだ、汐?」

彼が感慨にふけっていると、小首を傾げながら愛娘……汐が、一枚のパンフレットを指差して尋ねてくる。

「鳥、白いに、島……なんて読むんでしょうか、朋也くん?」

「どれどれ……ああ、ここに書いてあるな、とりしろじま、だつてさ」妻が、娘と同じように首を少し傾けながら覗き込んでくるのを横目に、朋也と呼ばれた夫は、パンフレットの隅々までに目を通す。

すると、島の説明が書かれている所に、小さく『とりしろじま』と漢字にルビが振られているのを見つけた。

「とろりろじま?」

「違いますよ、しおちゃん。とろしろじまですよ」

「おいおい、お前も言えてないぞ、渚」

「はい……言えてませんでしたね、えへへ」

そう、夫である朋也に言われた妻……渚は、照れたように少し顔を赤らめて笑う。

そんな愛妻の可愛らしい姿に、内心少しドキツとしながらも、傍目には平静を装いながら朋也はパンフレットを読み続ける。

「……へえ、なるほどな。瀬戸内海に浮かぶ島らしいぞ」

「うみ?」

「ああ、海だな」

そういえば汐を海に連れていたことはあまり無いなど、朋也は今までの生活を振り返って俯きつつ考える。

そしてそれは渚も同様だったようで、同じように考え込む。

「あのさ」「あの……」

しばらくして、二人同時にお互いの方に向き直り、全く同じタイミングで何かを言おうとする。

「ママ、パパ、仲いいね!」

その様子を見てにっこりと笑って、素直な感想を述べる汐。

そんな純粹かつ恥ずかしい娘の言葉に、朋也と渚は二人揃って照れ笑いを浮かべる。

「朋也くんから、どうぞ?」

「ああ……ええとさ、この島、行ってみないか? 汐も海に行きたそうだし」

「はい! ちようどわたしも、同じことを朋也くんと言おうかなって思っていました」

そして今度は、お互いの気持ちと同じだった事を喜ぶかのように、二人して微笑み、それを見ていた汐もまた、両親と同じように幸せな笑みを浮かべるのだった。

周囲が淡い緋色に染まりだした夕暮れ時……ガラガラと音を立てて、一軒の古民家の玄関の引き戸が横に動いた。

「帰ったよー、しろはー、羽未ー」

音をさせた主である男は、開いた玄関をくぐり家に入りながらながら、二人の名前を呼んだ。

少しして奥の方から、トタトタと軽快に小走りするような足音が聞こえ出し、それが徐々に大きくなる。

「おとうさん！お帰りなさい！」

「おー、ありがとうな。羽未」

笑顔で出迎える自身の娘……羽未に声をかけながら、男は愛娘の頭をそつと撫でる。撫でられた羽未は少しはにかむ。

「羽依里ー！ごめん、今ちよつと手が離せなくてー！」

「ああ、大丈夫だよ。そんなに多くないからな」

家の奥から、少し慌てたような申し訳なきさそうな、女性の声が響いてくる。

羽依里と呼ばれた男は、気にはしていないと伝えるかの様に明るく答え、両肩に一つずつかけていたクーラーボックスをしっかりと手で支えつつ、家の中に入った。

「あ、ごめんね羽依里……重たく、ない？」

「大丈夫だって、これぐらい……しろはこそ、夕飯作りで忙しかったんだろ？」

エプロンで手を拭きながら台所の方から現れた妻……しろはに笑顔で答えながら、羽依里は抱えていたクーラーボックスを二つ、床に降ろす。

そしてクーラーボックスの蓋を開けると、そこには大量の魚介類が詰まっていた。

「小鳩さん、明日から来る客の分だけで良いって言ったのに、なんかめちやくちや色々くれてさ」

「ああ……おじいちゃん、多分、羽未にとって、あれこれ多めに詰めたんでしょ？」

「正解。まあ、それはそれでありがたいし、嬉しいんだけどさ」
「わーい！私、おじいちゃんのお魚大好きだよ！」

やや過剰な、しろはの祖父である小鳩の、曾孫への愛情が詰まったその光景に、羽依里としろはは顔を見合わせて苦笑いを浮かべ、羽未は純粹に目を輝かせて喜んでいる。

「そうだな。小鳩さんのくれる魚は美味しいからな…お母さんに美味しく料理してもらおうな」

「うん！」

「じゃあ、今日はお刺身も追加しちゃおうか」

そんな話をしながら、今度は揃って笑顔を浮かべて、三人は頷き合った。

「そういうえば、今度来るお客さん…どんな人なの？」

夕食の後、片付けをしながら、おずおずとしろはが羽依里に尋ねる。

「えっと、三人連れの親子らしいぞ。確か夫婦に娘さんが一人、だったかな」

「そっか。うちと同じだね」

「女の子が来るの!?!」

自分の食器を台所に運んで戻ってきた羽未の耳に二人の話が入り、少し興奮気味に聞く。

「らしいぞ。歳の頃は…幼稚園か小学生くらいって言ってたかな？」

羽未より少し小さい位か」

「じゃあ、私がお姉さんだね！」

「お姉さんなら、そろそろ一人で寝れるようになってないかねー？羽未ちゃん？」

「そ、それとこれとは別だよー!?!」

腰に両手を当てて胸を張る羽未に、クスクスと笑いながらしろはの指摘が入る。

すると羽未は、顔を赤くしつつ、慌てて否定をする。

「うん、そうだね。私も羽未ちゃんや羽依里と一緒に、川の字で寝るの、好きだよ？」

「ああ……なんか、家族って感じするよな、あれ」

しろはと羽依里のフォローに、まだ顔を少し赤くしながらも、うんと大きく頷く羽未。

対する羽未の両親も、ただのフォローではなく本心からの言葉だったようで、慌てふためく羽未を見た後、お互いの顔を見合わせて笑顔が浮かべる。

「どんな子が来るのかなあ」

「お友達になれたら良いね、羽未ちゃん」

「この島だと同じくらいの子は少ないしな」

今度は宙を見つめて、幼い来訪者がどんな女の子なのかを、夢見る様な表情で想像している羽未。

その姿が可愛らしく思え、微笑みながら声をかける、羽依里としろはの二人。

「うん！」

それに明るく答える羽未の表情にも、期待に満ちた笑顔が浮かんでいた。

第一話く到着（1）く

夏の強い日差しに照り付けられながら、一隻のフェリーが、鳥白島の港へ入港していく。

完全に停泊したフェリーから、乗客が次々と降りてくる。

夏の休暇等をこの島で過ごそうと予定している人間が多いのか、その人数は普段よりも幾分か多かった。

その乗客の群れに混ざるようにして、朋也達の姿もあつた。

「ふー……ようやくついたな」

「今までにない位の長旅でしたね」

「ねこさん！」

家からこの島まで来るのにだいぶ距離と時間がかかり、やや疲れ気味の朋也と渚とは対照的に、港のあちこちに寝転がっている猫を見つけた汐は、疲れが吹き飛んだ様子で、ニコニコと満面の笑みを浮かべながら猫に近づいていく。

「汐は元気だなあ」

「船の中でも、ずっと外を見てはしゃいでいましたよね」

汐のはしゃぐ様子を、笑って眺める二人。

そんな二人の元に、一人の男性が近づいていく。

「あの、失礼ですけど、岡崎さん……ですか？」

男は少し緊張気味に、朋也と渚、そして汐を交互に見ながら、朋也に尋ねてきた。

「え？は、はい……そうですけど」

声を掛けられた朋也も、見知らぬ男性から急に名前を言われて、若干緊張した感じで答える

「ああ、良かった。親子連れが他に居なかったから多分そうだろうと思っただんですけどね。あ、俺は民宿『加藤家』の鷹原羽依里です」

「あ、今回お世話になる民宿の……」

「今日からしばらく、よろしくお願いします」

その男……羽依里の説明に、二人は緊張を解き、朋也は笑みを浮か

べ、渚は軽く会釈をして答える。

「はい、この島を存分に楽しんでいってください。じゃあ、近くに迎える車を停めてあるんでちょっと待っていてください」

羽依里も笑顔で答えて、駐車場の方へ歩いていく。

二人がその後ろ姿を見送っていると、楽しそうにはしゃぐ声が聞こえてきた。

「ねこさん、かわいいねー!」

朋也と渚が視線を向けると、そこには、一匹の猫を抱きかかえながら、猫に囲まれている、全身猫の毛だらけになった汐の笑顔があった。

「あー……」

「民宿に着いたら、お着換えししないですね……」

汐の、微笑ましくも少し困った姿に、苦笑を浮かべながら御互いに顔を見合わせる朋也と渚だった。

「な、なんか、すいません」

「あはは、大丈夫ですよ。この島は猫が多いですからね」

申し訳なさそうに謝る朋也と、全然気にしていないという様子で答え笑う羽依里。

羽依里の運転する、やや車内が広めの軽自動車には、助手席に朋也が座り、渚と猫の毛だらけの汐が、後部座席に並んで座っている。

「しおちゃん、あとでお着換えしましょうね」

「はーい……」

少し困ったような表情で言う渚に、汐は少ししよんぼりとした感じで返事をした。

「娘さん、おいくつなんですか?」

そんな汐の様子をバックミラー越しに見ながら、羽依里が隣に座る朋也に聞く

「今年で5歳です」

「じゃあ、来年小学校ですか……一番可愛くて、一番大変な時ですね」

「はは、そうなんですよ。活発過ぎて大変で……誰に似たんだか」

そう言いながら笑う朋也だったが、言葉とは裏腹に、その表情は我

が子の成長を嬉しく思う雰囲気にあふれていた。

「実はうちにも娘がいますね。歳は汐ちゃんより上なんです、うちの子もなかなかおてんばに育ってしまいました」

朋也のそんな様子を見ながら、破顔しつつ羽依里も自分の娘の事を語る。

「……パパたち、たのしそうだね？」

「ふふふ、そうですね」

朋也が汐の事を話せば、羽依里も羽未の事を語る。

言葉では困ったただの手を焼くだのと言いつつ、朗らかに楽し気に語り合うその様は、まるで愛娘の自慢合戦をしているようで、民宿までの車中は、とても和やかで明るい雰囲気で、時間が過ぎていった。

第二話く到着（2）く

父親二人による娘談義が続く中、四人を乗せた車は長閑な道を走る。

やや平地が少ない鳥白島の風景は、開けた平坦な場所よりも、坂道や、森や山に面した光景が多く、道を進むにつれて景色がころころと変わる。

車内前方で盛り上がっている話をよそに、汐の目はその次々と移り変わる外の情景に奪われていた。

「すごいねーはたけもきも、いっぱいー！」

「そうですね……自然が豊かですね」

目をキラキラと輝かせながら、興奮した様子の汐に、同じく外を眺めながら笑顔で優しく答える渚。

汐と同じく、自然がすっかり息づいている島の様子を微笑ましく想っているようでもあり、また、それを見て嬉しそうに楽しそうにしている、愛する娘の姿を見て、喜んでいるようでもあった。

「……この島の皆さんは、本当にこの島を愛しているらしいやるんですね」

まるで無意識に、感じたままの気持ちが口から出たかのように、渚がぼつりと呟く。

同時に、彼女の脳裏には、自分達が住む街の事が思い出されていた。

年月を重ねる度に、開発計画や、住民の増加などで、日々変化していく自分達の街。

けれども、そこに住む人達には、そんな自分達の街を大切に思う想いが確かにある……感じられる。

渚は、それと同じ物を、この島と、此処に住む人達の様子から、感じ取っていた。

「ん？……ええ、解りますか。この島に住んでる皆、不便だなんだと文句言ったりしてますけど、この鳥白島が好きなんですよね。俺は、元々は島の外から来た人間なんですけどね……俺も、今はこの島が大好きです。良い島ですよ」

渚の眩きが偶然耳に入ったようで、御互いの娘の話で熱く朋也と語り合っていた羽依里が、そう答える。

「……色々あっても、生まれたところとか、家族で住んでるところってのは……特別で、大切ですよね」

羽依里の言葉を聞いて、少し物思いに耽ったかのような表情で、朋也が言う。

「そうですね……俺なんかは、この島と島の皆に救われたようなものですからね。やっぱり、特別で大切……ですね」

朋也の言葉に、今度は羽依里も同じような表情をして返す。

「……パパたち、こんどはむずかしいかおしてる?」

「ふふ……そうですね」

朋也が語った言葉に含まれているその想いを察し、また、朋也と同じような表情を浮かべる羽依里を見て、二人ともが、それぞれの今いる場所を大事に想っているのが伝わってきて、渚は嬉しそうに笑顔を浮かべていた。

「着きましたよ、この家が民宿です」

一軒のやや大きな古民家の玄関前で車を停めると、羽依里はそう言って車のエンジンを切った。

「荷物とかをここで降ろして、中に入って待っていてください。その後俺は車を戻してきますんで」

「はい、解りました」

そう言って羽依里、次いで朋也が車から降り、トランクの方へ積みである荷物を降ろし始める。

「しおちゃん、わたし達も行きましようか」

「はいーいー」

その様子を見て、渚と汐も車から降りる。

それとほぼ同じタイミングで、古民家の中から何やら音が聞こえ出し、次第に大きくなっていく。

「あー……」

その音を聞いて、苦笑いを浮かべる羽依里。彼が玄関の方へ目を

やった瞬間、勢いよく玄関が開いて音の主が姿を現した。

「いらっしやいませー！ようこそ『加藤家』へ！」

羽依里以外の全員の視線も声の方へ向けられると、そこには、玄関先で仁王立ちになって、朋也達の方へ大きくお辞儀をする羽未の姿があった。

「こら、羽未……家の中で走るなって言っただろ？」

「お、お客さんを待たせたら悪いじゃないですか！お父さん！」

たしなめられて少しばつが悪そうにしながらも、胸を張って正当性を主張する羽未。

「……まあ、そういう事にしておこうか。じゃあ、俺は車を戻してくるから、お客さんを中心に案内してあげてくれ」

苦笑いしつつ、本気で怒っている訳でもない様子の羽依里は、やる気満々と言った様子の羽未に仕事を頼む。

「はい、任せてくださいー！皆さん、どうぞこちらへ！」

父親の手伝いが出るのが嬉しいのか、少し興奮したようなはしゃいでいるような様子で、羽未が朋也達を中心に案内しようとする。

その様子を見て、朋也と渚の表情にも思わず笑顔が浮かぶ。

「じゃあ、お願いしようかな」

「そうですね、よろしくお願いしますね？」

「はいー」

そんなやり取りの中、不意に汐が羽未に近づいて上目遣いに眺める。

「……おねえちゃん、よろしく？」

「お、おねえちゃん……！」

それなりに周辺の島の中でも、人口が多い方である鳥白島とはいえ、なかなか羽未より年下の子供は居ないのが現状である。

そんな中で、汐からお姉さん呼びされた羽未は、普段あまり無いシチュエーションに、恥ずかしそうに、けれどもまんざらでもない感じで、照れた様子を見せる。

「そ、そうですね、羽未お姉ちゃんですよ、よろしくお願いしますね！」

「えと……うしお、です、よろしくね？」

「……きゅん」

小首を傾げながら自分の名前を言い、自己紹介をする汐の姿を見て、ときめくような擬音を口にしながら胸を抑える羽未。

「……羽未、そろそろお父さん車を戻してきたいんだけど……」

そんな微笑ましい二人の様子を眺めて笑いながら、少し困ったように羽依里が言った。

第三話く到着(3)く

「おかーきーん！お客さん来たよー！」

玄関を開け、家の中に向かい、元気な声で叫ぶ羽未。

そしてそのまま返事を待たずに、靴を脱ぎ家に入り、ぐるりと振り返って素早く脱いだ靴をそろえると、玄関をくぐって中に入ってきた朋也達に向き直る。

「改めまして、ようこそ民宿『加藤家』へ！こっちの居間でくつろいで待っていてください！」

そう言つて奥の方を指した後、ペこりとお辞儀をして、自身は別の方へ消えていく。

「とても元気な子ですね」

「そうだな」

そんな羽未の姿を、微笑みを浮かべて見送つた朋也と渚は、荷物を玄関に置いて靴を脱ぎ、家へ上がったからそれを揃える。

「よいしょっ」

その様子を見た汐も両親に倣い、玄関に腰掛けて靴を脱いで上がり、脱いだ靴を揃えようとする。

「わあ!？」

「危ないっ」

「おっとー……ふう……気を付けるんだぞ、汐？」

「う、うん……パパ、ありがとう」

前のめりになり過ぎて、危うく入口側に転がりそうになった汐を、すんでのところで抱きかかえて支える朋也。

その様子を見て、声を上げた渚も安心した様子で息を吐き、当の汐も少し驚いた様子を見せながら、朋也に答える。

「せっかくの夏休みなのに、怪我なんかしたら楽しい事も出来なくなっちゃうぞ？」

「やだー！」

「だろう？だつたら気を付けような？」

「うん！」

朋也は、責めるでもなく、諭すように言つて、汐の頭を帽子越しに撫でる。

汐は、顔を上げて満面の笑みと共に答えた。

「朋也くん、ありがとうございます」

「ああ、ちよつとヒヤツとしたけどな」

苦笑いを浮かべて、朋也は渚に答え、その後汐の方を振り返る。

「でも、こういう事も自分でちゃんと出来る様になってきたんだよなあ」

「ええ、しおちゃんは賢いし良い子ですから」

些細な事だが、我が子の成長を感じられるちよつとした出来事に、思わず笑みを浮かべる朋也と渚だった。

親子三人は、玄関での小さなハプニングを経て、無事に民宿の中に入り、案内された居間に向かう。

部屋に入ると、そこは畳敷きの和室になっており、朋也達三人が手足を広げて横になつても、十分にくつろげそうな程の広さがあった。

部屋の真ん中にはテーブルが一つあり、端にはテレビが、テレビ台と共に置かれている。

「わー！ひろいね！」

とたとたと部屋を走り回る汐。その様子を眺めながら、朋也は荷物を部屋の隅に置き、ふつと一息つく。

「ありがとうございます、朋也くん。重くありませんでしたか？」

「ああ、大丈夫だ。これくらいなんて事ないさ」

気遣う渚に、力こぶを作るようなジェスチャーをして答える朋也。

「とりあえず、お言葉に甘えて少し休ませてもらおうぜ」

「はい、そうですね」

朋也がまず荷物の傍に座り、続いて渚もその横に座る。汐は変わらぬはずはしゃいでいて、今は畳の上でごろごろと転がっていた。

「しおちゃん、あんまりはしゃぐと危ないですよ。あと、お着換えしないと……猫さんの毛がいつぱいついたままですよっ！」

「あつ……うん、そうだったね」

渚に言われて、自分の衣類についていた沢山の猫の毛を思い出した汐は、ぴたつと止まって申し訳なさそうに立ち上がって渚の傍に寄つてくる。

「大丈夫だよ」

「え？」

不意に聞こえた三人の誰とも違う声に、朋也達は一斉に声の方へ振り向く。

振り向いた先……部屋の入り口には、髪も肌も透き通る様な白さの、長髪の女性が立っていた。

「こんにちは。岡崎さん一家……だよね？」

「え、あ、はい」

「初めまして、鷹原しろはです。夫の羽依里と一緒に、この民宿をやっています」

そう言ってお辞儀をするしろはにつられて、朋也と渚、そして汐もぺこりと会釈をする。

「あ、俺は岡崎朋也です」

「妻の渚です」

突然現れたしろはに動揺していた朋也と渚だったが、すぐに立ち上がり、同じように自己紹介をしてお辞儀をする。

「えと……うしお、です」

両親の姿を見て、同じように汐も改めて自己紹介と共にお辞儀をする。

「ふふふ、可愛いね」

そんな汐の姿を見て、笑みをこぼすしろは。

「えつと……ところで、大丈夫と言うのはどういう事なんでしょう？」

ふつと、疑問に思った事を、渚がしろはに問いかける。

「それはね……羽未ちゃんもたまに、猫と遊んで毛だらけで家にながって来ちゃうから」

浮かべた笑みに、少し意地悪な雰囲気を加えて、楽しそうにしろはが言う。

「な、なるほど」

「そうなんですな……ふふ」

しろはの返答に、朋也は納得した様子で、渚はその羽未の様子を想像して可愛らしく思ったのか、微笑んで答えた。

「ただいまー」

「あ、お帰り。羽依里」

「おとうさんお帰りなさいー!」

玄関から羽依里の声が聞こえると、しろははそちらに向き直って答え、更に奥からは羽未の明るい元気な声が聞こえてくる。

少しして、羽依里が居間に姿を現し、その後を追いかけるように、羽未も部屋に入ってきた。

「あ、すみません。くつろがせてもらってます」

「ああ、長旅で疲れたでしょう。自分の家だと思ってのんびりしてください」

「ええ、お言葉に甘えさせてもらいます」

「食事は魚でも肉でも、どちらもあるから、好きなを言ってくれれば用意できるよ?」

「よ、良かったら私も手伝わしてくれませんか? 何もしないのは落ち着かなさそうなので」

親同士が話し込んでいると、不意に羽未の傍に汐が寄ってくる。

「おねえちゃん、ねこさんすき?」

「え? う、うん……好きですよ? どうしてです?」

「ねこさんとあそんで、そのままけだらけでおうちにあがつちやうつて……」

汐の言葉に羽未が顔を赤くする。

「お、おとうさん!? 汐ちゃんに何か変なこと言いました!」

「ええつ? 俺何も言っていないよ?」

「じゃあ、まさか……おかあさん!」

「……」

視線を向けられたしろはは、目をつぶり、一瞬沈黙した後……

「……うん、当たり前」

にっこりと笑って羽未に答える。

「も、もー！なんでそういう恥ずかしい事言っちゃうんですか！」

「ふふふ、ごめんごめん」

ほかほかとしろはを叩く羽未。けれどもその手に力はこもっておらず、恥ずかしさを紛らわす為の物であり、それが解っているしろはは、謝りながらも笑って、それを受け止め続ける。

「な、なんか、しろはさんって……」

「は、はい……面白い方ですね」

「しろは、時々羽未をからかうのが好きだからなあ……」

そんな光景を、朋也、渚、そして羽依里は、和やかな表情で眺めていた。

第四話く馴れ初めく

夕飯時、民宿『加藤家』の食卓に様々な料理が並んでいる。

「魚でも肉でも大丈夫っていうから、とりあえず今日は魚にしてみましたよ」

「すごいな、これは」

「しろはさん、料理の腕も凄かったです」

朋也は豪勢な魚料理に驚き、渚はしろはの料理を間近で見、その腕の良さを興奮気味に話す。

「しろはは料理上手だからなあ」

「おかあさんの作るご飯は、どれも美味しいんです！」

羽依里がそう言い、羽末はまるで自分の事が如く胸を張る。

「ふふふ、ありがと。皆、冷めないうちに食べてね？」

『『いただきます！』』

全員の声が重なる。

「……おいしい！」

まず声を上げたのは汐だった。刺身を一切れ頬張ってもぐもぐと口を動かしている。

「どれどれ……うん、確かに美味しい」

「この島で今日獲れた魚の刺身だから、市販の物とは全然違うんだよ」

朋也が舌鼓を打つのを見て、自慢気に語る羽依里。

「なんで羽依里が偉そうに言うの」

そんな羽依里に苦笑いを浮かべながら突っ込みを入れるしろは。

「お二人は、とっても仲が良いんですね」

その様子を見て、ふと食事の手を止めて渚が言う。

言われて羽依里としろはは、御互いに顔を見合わせ、照れた様に答えた。

「でも、一番最初に出会った時は、最悪の出会いだったんですよ」

「そうだね。あの出会いから、まさかこんな事になるなんてね」

そう言って、同じように意味深な笑みを浮かべ、微笑み合う二人。

その表情を見た朋也は、ただの仲が良い夫婦のやり取り以上に、自身にも身に覚えがあるような、延々と二人の間で積み重ねてきた『何か』があるような、そんな、あるはずの無い懐かしい印象を受けた。「あの……良ければ、どんな出会いだったのか、聞いても良いですか？」

朋也の横に座っていた渚が、おずおずと、でも好奇心を抑えられないという感じで聞く。

今度は二人とも苦笑いを浮かべて答えた。

「夜のプールでしろはが泳いでるところに、俺が偶然出くわして……」「恥ずかしかつたから早くどっか行ってほしくて、思わず「どすこい！」って言っちゃって……」

「どすこい、って……相撲のアレ、じゃないですよね？」

話を聞いていた朋也が疑問に思った事を尋ねる。

「ああ、うん。えっと……確か、貴方を駆逐したい、とか、そんな意味だったっけ？」

「う、うん……そう」

意味を確認する羽依里に、昔の事だが思い出してばつが悪くなったのか、自然と目をそらして答えるしろは。

「……ど、どこをどうしたらその馴れ初めから、夫婦にまでなるんですか!？」

「えっと……色々と愛をはぐくんんで？」

「そ、そんな恥ずかしい事なんですか!？」

「いや、なんで夫婦になって言われたしさ……違ってたか?」

「あ、いや……違わ、ない、けど……」

(……羽依里さん、結構天然なのか?)

(ラブラブです……すっごいラブラブです)

さらりととんでもない事を言う羽依里に、慌てたり真っ赤になって俯くしろはを見て、朋也と渚は言葉に出さないうで、胸の内に留めつつ、感想を述べる。

だが、子供達にはそんな配慮は存在しない。

「おねえちゃんのおとうさんとおかあさん、なかよし?」

「そうですよ、とつても仲良しです!」

「ちよ、ちよつと羽未ちゃん!」

物凄く勢いよく汐に答える羽未に慌てて声を掛けるしろは。

「そうなんだ!でも、パパとママもなかよしなんだよ!」

「え?」

「あ……」

誇らしげに語る汐。何か嫌な予感を感じ声を上げる朋也と渚。

無邪気な子供の純真な一言は、今度は話の流れを逆方向に傾けるきつかけとなる。

「そ、そういえば、岡崎さん達は、どんな馴れ初めだったの、かな?」

まだ頬を赤くしているしろはが、ややしどろもどろになりつつも、朋也と渚の方へ話を振る。

「そうだな。俺達も話したし、もし良ければ聞いてみたいな」

羽依里も何故だか楽し気にしろはの言葉に乗っかる。

「え、ええつと……ど、どうだったっけ?」

「ど、どうでしたっけ?」

逆にあわあわとし出した朋也と渚に、とどめの一言が放たれる。

「パパとママの……なれそめ?しりたいな」

「汐!」

「しおちゃん!」

若干、期待を含んだ、きらきらとした目で両親を見つめる汐。

その視線を痛いほど感じ、観念した朋也が口を開く。

「……馴れ初めっていうか、出会い、っていうか……俺と渚が通ってた高校の通学路の途中の坂で、渚が「あんばん!」って叫んでる所に出くわしたのが、出会いっていうか……」

「は……」

語る朋也と、それに頷く渚。

一瞬時が止まったような雰囲気になる。

「え、えつと……どすこい、みたいに何か特別な意味が?」

「い、いえ!あの、食べると美味しい、餡子の入った、あんばんです!」

「……通学路の途中で?」

「は、はい……俺もびっくりしましたけど」

完全に攻守逆転した形で、羽依里としろはが質問し、渚と朋也がそれに答える。渚は恥ずかしさのあまり、真っ赤になってしまっている。

「と、朋也くん……とても恥ずかしいです」

「諦めろ、渚。流れとは言え、汐がああ言った時点で俺達の負けだ」
「？」

当の汐は、大人達が何故恥ずかしがったり照れまくっているのかが解らず、首を傾げて眺めている。

対してその横に居る羽未は、何度もうんうんと頷きながら、ニコニコと、照れ恥ずかしがる大人達を眺めていた。

「はあー……汐ちゃんのおとうさんとおかあさんも、うちのおとうさんとおかあさんに負けないくらい、ラブラブなんですねぇ……」

「うんー！」

しばらく二組の夫婦の様子を楽しんだ後、胸の前で手を組み、目を瞑ってしみじみと言う羽未に、汐は満面の笑みで元気に答えた。

第五話く朝の一幕く

鷹原・岡崎両夫妻が、過去の馴れ初めを語り合った夜から一晩明け
て……

「おとうさん！朝ですよー！」

からつとした乾いた熱気と、扇風機や開け放たれた窓から、心地よい風が吹き抜ける『加藤家』に、朝の太陽にも負けないような眩しい声
が響き渡る。

「……ん？」

「ふああ……おはようございませ、朋也くん」

その声に揺り起こされるかのように、朋也と渚が目覚めます。

汐は、昨日の島までの旅の疲れがあったのか、まだすやすやと眠っている。

「う、羽未ちゃん。お客さんが居るんだからあんまり大声出しちゃダメだよ？」

「あつ……ご、ごめんなさい」

幾分かトーンを抑えて羽未を叱るしろはの声と、同じように抑えた声で謝る羽未の声が聴こえてきて、朋也と渚は思わず顔を見合わせて笑う。

「時間は……6時か。ちょうどいい時間だから俺達も起きるか」

「はい、そうですね」

反射した、窓から差し込む日差しに照らされた、壁に掛けられている時計を見ると、きっかり6時を指していた。

「しおちゃん、朝ですよ？」

「……ん……」

渚が優しく声を掛けると、掛けられていた布団ごと何度かもぞもぞと動いていた汐はゆっくりと目を開け、寝ぼけ眼のまま身体を上半身だけ起こした。

「ママ、パパ、おはよう……」

「ああ。おはよう、汐」

「おはようございます……しおちゃん、ママと一緒に、洗面台を借りて顔を洗いに行きましようか？」

「……ん……」

二人に挨拶しつつ、ふらつきながら布団の上に立ち上がる汐の様子を見て軽く苦笑を浮かべながら、渚がそういうと、汐も小さく頷きつつ、眠気に負けたのか、渚にぽふりと身体を預けて寄り掛かってしまった。

「おやおや……」

「ふふふ……昨日は長旅で疲れちゃったんですね、きつと」

そう言っつて汐を抱きしめ、その頭を撫でる渚。そんな母子の光景を、朋也は嬉しそうな笑みを浮かべながら眺めていた。

「朋也くん、このまましおちゃんと一緒に先に顔を洗いに行っつて来てもいいですか？」

「ああ、いいぞ。じゃあ、その間に俺は着替えておくかな」

「はい」

答えると渚は汐を倒さない様にゆっくり起き上がり、立ち上がってから今度は汐を抱きかかえて、部屋の外へ消えていった。

「さて、着替えるか」

そう言っつて朋也も布団から出て、立つと同時に一つ、大きく伸びをした。

「じゃあ、俺も行っつてくるかな」

渚と、まだ眠そうな目をしている汐が部屋に戻つてくると、今度は着替えを終えていた朋也が洗面台へ向かおうとする。

「はい、行っつてらっしやい」

「パパ、いつてらあさー……」

「汐、ちゃんと言えてないぞ？」

眠さに負けそうになりつつも送り出そうとしてくれる愛娘の姿に、思わず嘖き出しそうになるのを堪えて、朋也は部屋を出る。

「あ、あのー」

急に声を掛けられ、朋也がその声の方へ向くと、そこには羽未が立っていた。

「す、すいません、もしかしてさっきの声で起こしちゃいましたか？」

「あー……いつも家でもこれくらいの時間にはもう起きてるから大丈夫だよ」

申し訳なさそうに尋ねてくる羽未に、朋也は、あまり気にさせない様にと、明るく笑顔で答えた。

「そ、そうですか」

朋也の言葉を聞いて、少しほっとした様子の羽未の後ろに、人影が迫る。

「でも、お客さんがいる時はあの起こし方は控えような？正直俺も恥ずかしい」

「おとうさん！そもそもおとうさんが朝ちゃん起きてくれれば問題ないじゃないですか！」

羽未の頭に手をやり、ぽふぽふと撫でる人影……羽依里がそう言うのと、むくれ面になった羽未が撫でられながらも反論する。

その表情は、羽依里の寝起きの悪さに怒っているのと、撫でられて喜んでるのが混ざったような、微妙な、変な顔になっていた。

「……ぷっ……」

「ほら！岡崎さんに笑われちゃいましたよ！もう、おとうさんったら！」

「いや、これは多分俺じゃないと思うんだけど……」

羽未の絶妙な表情に、たまらず小さく噴き出した朋也。それを見て父親の情けない姿を笑われたと思う羽未。羽依里は羽依里で、羽未の表情と朋也の反応を見て、何故彼が噴き出したかを大体察し、自身も羽未の表情を見て少し笑いながら、そう答えた。

「おっと、それより……岡崎さん、何か用事があったんじゃないかな？」

「あ、はい。さっき起きたんで、ちょっと顔を洗わせてもらおうかなと思ってる……」

「ほら、羽未。引き止めちゃだめだぞ？」

「うー……はい」

何となくはぐらかされた感がするものの、引き止めているのは事実なので、素直に引き下がり奥の方へ戻っていく羽未。

「……しつかりしたお子さんですね」

「はい。ちよつとませてますけどね」

そんな羽未の後ろ姿を、互いに愛する娘を持つ二人の父親は、同じように慈愛に満ちた目で見つめていた。

「あ、朋也くん。お帰りなさい」

「おかえりー」

「お邪魔してます」

朋也が部屋に帰ってくると、そこには着替えを終えた渚と汐と共に、しろはも並んで座っていた。

「おはようございます……どうしたんですか？」

渚と汐に頷いて返しつつ、しろはに聞く朋也。

「えつと、朝御飯は何か良いか聞きに来たんだけど……」

「昨日のお料理が凄かったので、その話をしていたら話が弾んでしまつて……色々しろはさんに料理のコツを聴いてたんです」

「あー……昨日、相当美味しいって感動していたもんな、渚」

「はい！おうちでもあんな料理が出来たら、朋也くんやしおちゃんに喜んでもらえるかなと……」

「そ、そんなに目の前でべた褒めされると、恥ずかしいよ!？」

まるで子供の様に目を輝かせて語る渚と、照れたような表情でわたしだすしろは。

「な、なるほど……」

そんな二人の様子に、何と言つて良いか解らない風に、朋也は言つて苦笑いを浮かべた。

「お、皆ここに集まつてたのか」

ちよつとそこに羽依里と羽未も現れる。

「ええ。渚がしろはさんに料理のコツを色々聴いていたみたいで」

「なるほど。しろはの料理は凄く美味いからなあ」

「おかあさんの料理はどれも美味しいんです！」

「は、羽依里！羽未ちゃん！」

思わぬタイミングで身内からも褒められ、しろはの顔がみるみる真っ赤になっていく。

「……うーん……でも……」

そんな一同の様子を眺めていた汐が急に唸りだし、全員が彼女の方へ向く。

すると汐は渚の傍へ寄っていき、ぴたつとくつついた。

「うしおは、ママのごはんがいちばんすきだよ？」

おずおずと、少し照れ気味に言い、言い終わった後、皆の視線から逃れるように渚の後ろに隠れる汐。

そんな汐の言動に、思わずその場にいた全員が微笑みを浮かべる。

「しおちゃん……ありがとうございます」

そして渚は、そんな汐にお礼を言いつつ、後ろに手をまわして隠れた汐の頭をそつと撫でる。

そんな二人の光景を、朋也や鷹原家の面々は、更に暖かな笑みを浮かべながら見守っていた。

第六話くチャーハン・ラプソディく

「こ、これは凄いな」

「そ、そうですね」

『加藤家』の朝の食卓に並んだ品数に驚く朋也と渚。

小鉢などの小さな器に入った品が大半だったが、海苔の佃煮や里芋の煮ころがし、細かく刻まれた野菜の煮物に、魚の干物や目玉焼きなど、少量ずつだが品数多く、和室の真ん中にある大きなテーブルの上にずらりと並べられていた。

だが朋也達の目は、それらの品を見回すことなく、その中の一品に向けられたまま止まっていた。

「……ちやーはん?」

「そうですね、チャーハンです!」

汐が小首を傾げながら、一番目の前に置かれた器に盛られた品の名を口にする時、その眩きを受けて羽未が胸をそらして自慢気に言う。

食卓に並ぶ、純和風な品々の中で、各人の席の一番手前に置かれた、本来普通の食卓では白飯があるだろう位置にある、皿に盛られた炒飯が、異彩を放っていた。

「ええつと……朝御飯、ですよね?」

「そうですね。うちはチャーハンが大好きな物で……」

「おかあさんのチャーハンはとっても美味しいんです!」

恐る恐る尋ねる朋也に、羽依里は少し苦笑いを浮かべながら、羽未は満面の笑みを浮かべながら答える。

「ごめんなさい。いつもの癖でご飯を全部チャーハンにしてしまっ……」

そう言いながら羽依里と同じように苦笑しつつ、しろはが食卓に戻ってくる。

「ま、毎朝なんですな……」

「うん。羽未ちゃんがチャーハン好きだから」

「羽未ちゃんが……それなら納得です」

まだ少し衝撃を受けた様子の渚に、しろはが笑顔で答える。その言葉と雰囲気に、娘への愛情を感じた渚は、そう言つてしろはに笑いかけた。

「それに、俺も最初は朝からチャーハンは重たかったけど、これはこれで慣れると意外と悪くないんですよ。岡崎さん達も試してみてくださいませい」

「そ、そうなんですか。じゃあ、せっかくだし頂いてみようか？渚、汐……」

「そうですね。朝からチャーハン……少し興味あります」

「うん！チャーハンおいしそうだよ」

岡崎家のそんなやり取りを見て、羽依里としろはは顔を見合わせて微笑み、その後、羽依里は岡崎家の方に向き直る。

「それじゃあ、食べましょうか」

「あ、はい」

『『いただきます』』』

昨晚同様、全員の声が重なり朝の食事が始まる。

最初の一口目は、奇しくも全員同じくチャーハンだった。

チャーハンの皿に添えられたレンゲで、掬い口に運ぶ岡崎家の三人。

「……………これは……………美味しい」

「はい、美味しいです……………それに、すごくあつさりしてます！」

「おいしー！」

三者三様の良い反応に、思わずしろはの表情に笑みがこぼれる。

「うん、あつさりしてると思う。朝に作るチャーハンは、羽依里が胃もたれしない様に、味付けをあつさり目に工夫してるんだよ」

「え、そうだったの？」

普通に食べ進めている羽依里の手が意外そうな表情と共に止まり、羽依里はしろの方を見る。

するとしろはは少しだけムツとしたような表情を浮かべた。

「そうだよ。羽未ちゃんは物心ついた時からチャーハンが好きだったけど、羽依里は最初の頃、チャーハン歴がまだ短かったから……美味しく食べてもらうのに苦労したんだよ?」

「そ、そうだったのか……俺の為にいつもありがとう、しろは」
「べ、別にそんな事ないし……いつも、羽依里の事を考えてる訳じや……」

羽依里が真顔で感謝を述べると、今度は少し照れたような恥ずかしそうな表情をして、しろはがそっぽを向く。

「でも、おかあさん……おとうさんが外に出てる時とかに、おとうさんの話を結構してますよね?」

「こ、こら羽未ちゃん、変なこと言わないの!ほら、食べるのに集中しないとご飯をこぼしちゃうよ!」

「はい」

少しニヤニヤしながら、チャーハンを食べる手を止めて恥ずかしい暴露をする羽未に、しどろもどろになるしろは。

「……きゅん」

「な、何がきゅんなの、羽依里!」

そんな自身の妻子の様子を見て、ときめき和んでいる様子の羽依里に、更にしろはの動揺が加速する。

「な、なんか……ラブラブ、だな」

「そ、そうですね……」

「ちやーはん、おいしいね」

そんな羽依里としろはの様子を見て、何故か朋也と渚も照れてしまう。

そして、美味しいチャーハンに夢中になっていた汐は、そんな周りの状況に気づかず、こぼれるような笑みを浮かべながら、食べ続けるのだった。

朝食を終えて一時。

かちやかちやと、しろはと渚が食器を洗う音が、台所から聞こえてくる。

その音を聞きながら、羽依里と朋也は和室で共にくつろいでいた。
「びつくりしたでしょう。朝からチャーハンなんて」

「え、ええ、まあ……でも、美味しかったし何より食べやすかったですよ。渚も言ってくれけど、あっさりしてて」

その言葉を聴いて、うんうんと頷き、我が事のように喜んでいような様子を見せる羽依里。

「……チャーハンは、美味しいだけじゃなくて、我が家にとって特別なんですよ」

「特別？」

「はい。絆というか、要というか……」

「ああ、なるほど……わかります」

話を聞いている朋也の脳裏に、だんご大家族が浮かぶ。

「俺達にも、そういうのがありますから。昔流行った、だんご大家族って知ってますか？」

「ああ、ありましたね」

「渚が大好きなんです。俺は最初、そこまででは無かったんですけど……いつの間にか、渚に影響されて、俺も大好きになってしまってた」

「……わかるなあ」

今度は、羽依里が朋也に同意する。

「最初の頃の一時期、毎食チャーハンという日々が続いたことがあるんですけどね。最初は胃に辛かったけど、色々あって、今では思い出深い、いつでも食べたい品になってしまってた」

「しろはさん、料理の腕が凄いですしね」

「いや……その時に作ってくれていたのは、羽未だったんですよ」

「えー！羽未ちゃんか!？」

思わず朋也は、食後からずっと汐と一緒に、絵を描いて遊んでいる羽未の方を見る。

「……羽未ちゃんって、幾つでしたっけ？」

「あー……まあ、色々複雑な事情があったんですよ」

「そ、そうですね……そうですね、色々な事情ってありますよね」

苦笑いを浮かべて歯切れの悪い羽依里の様子を見て、朋也もそれ以上

の追及はしなかった。

それと同時に、羽依里の言葉を受けて、朋也の脳裏には、自分達の経験してきた『複雑な事情』が呼び起こされる。

「色々あつて……でも、今こうして家族でいられるなら、それで十分ですよね」

「……うん、そうですね」

羽依里も何かを思い出し、そして朋也の意見に同意する。

そんな、少し感傷的になっている二人をよそに、台所からは、食器の重なる音と共に、しろはと渚の弾んだ楽しそうな話し声が聞こえていた。

第七話く鳥白島の看板娘（1）

「準備しておいてもらって置いてなんですけど、本当に良いんですか？」

「ええ、普段は漁師の方々の手伝いをしたりしてますけど、本業は民宿運営ですから」

助手席で申し訳なさそうにしている朋也に対し、羽依里は笑って答え車に刺さったキーをひねる。

エンジンが音を立てて動き出し、羽依里と朋也、そして後部座席に座った渚と汐を乗せた車が小刻みに揺れ出す。

「歩いて散策するのも良いですけど、汐ちゃんも居ますしね」

「……じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます」

ちらりと汐の方を見てから、羽依里に小さく会釈する朋也。

当の汐はというと、その様子を見てきよとんとしている。

「ええと、じゃあまずは子供にとつては一番嬉しいだろう所から……良いですかね？」

「はい、お願いします」

朋也の返事を聞いた直後から、アクセルを踏み込まれた車のエンジン音が徐々に大きくなり、四人を乗せて颯爽と走り出した。

十分ほど走った後、車は一軒の店の前で停車する。

通行の邪魔にならない様に端の方に止められた車から降りた羽依里達に、夏の強い日差しが容赦なく降り注ぐ。

「ここは……駄菓子屋ですか？」

「ええ、島で唯一の駄菓子屋です」

「おかし、いっぱいある？」

羽依里と朋也の会話を聴いて、心なしか目を輝かせて汐が二人に問い掛ける。

「うん、この店は駄菓子から土地の権利書まで何でも揃えてるからね」

「……あの……駄菓子屋、ですよね？」

「ははは。まあ、中に入って店の看板娘に聞いてみてください」

「は、はあ……」

おかしそうに笑う羽依里と、半信半疑な表情の朋也と渚、そして楽しそうな汐が連なって店に入ると、奥の和室から、長い水色の髪をした、駄菓子屋にはやや不釣り合いな洒落た洋服で着飾った女性が出てきた。

「いらっしやーい……あら、羽依里じゃない」

「やあ、蒼」

蒼と呼ばれた女性は、土間になっている商品が並べられているスペースへ、靴を履いて降りてくる。

「今日は今うちに泊まってくれてるお客さんを案内してきたんだ」

「ああ、民宿のね。こんにちは、この駄菓子屋の看板娘の空門蒼です。よろしくね」

羽依里から事情の説明をされた蒼は、朋也達三人の方へ向き直って挨拶し、綺麗にお辞儀をする。

「どうも、岡崎朋也です」

「岡崎渚です」

「うしおです」

朋也と渚が挨拶を返し、汐がぺこりとお辞儀をして、二人の真似をして挨拶をすると、蒼の動きが止まる

「……か……か……」

「……か？」

蒼の謎の眩きに怪訝そうな表情をする一行。

「かわいいいいい！」

「！」

次の瞬間、蒼は汐に駆け寄り、きらきらした目で汐を間近で見つめる。

すると汐は一瞬身体をびくつかせた後、逃げる様に渚の後ろへと隠れてしまった。

「おい蒼……」

「あ、あははあ……ごめんごめん。驚かせちゃったわね」

ジト目で見る羽依里に、苦笑いを浮かべる蒼。

「な、なんか……明るい人だな」

「そ、そうですね」

朋也と渚は思わず苦笑し、汐は渚の後ろからちらちらと蒼の方を窺っている。

「コホン……ええつと、最初に言ったように、ここは駄菓子屋……つて言っても、普通の駄菓子屋とはちよつと違うわね。釣り具とか、キャンプ道具とか、何でも大体揃ってるわ」

「えつと……土地の権利書とかも？」

「あるわよ、今だと手頃な中では……山田さんちの畑が売りに出されてたわね」

「本当にあるんですか!？」

「ええ」

蒼の説明を受け、冗談半分で朋也が聞くが、即答されて思わず渚が驚きの声を挙げ、朋也も呆気にとられる。

その様子を見て面白そうに羽依里が笑う。

「……って感じです」

「マジですか……冗談だと思ってましたよ……」

「ま、昔からこの島で続いている駄菓子屋だしね。島に関わる大抵の物はあるわ」

「おー……おかしも、ある?」

そう言っただけに胸を張る蒼。その説明を受けて、まだ渚の後ろに隠れ恐る恐るという様子ながら、感心したような声を挙げて汐が蒼に問い掛ける。

「ええ、そりゃ駄菓子屋ですもの。今時のから古いのから、沢山揃ってるわよ。色々と見てみると良いわ……ね?」

「……うんー!」

今度は怖がらせない様にと、やや距離を取り、優しい笑顔でウインクを一つして、蒼がそう言っていると、汐はゆつくりと渚の後ろから出てきて、笑顔を浮かべて答えて、お菓子の置いてある棚の方へ走っていった。

第八話く鳥白島の看板娘（2）

「ママ、パパ、これなーに？」

「お、これ……昔父さんが俺によく買ってきてくれたやつだな、まだあつたんだ」

「じゃあ、これかうー！」

「それじゃあ、しおちゃんとパパとママと、三人分買って食べましょうか？」

「うんー！」

岡崎家が棚に並んでいる駄菓子を選び楽しんでいる。

そんな微笑ましい光景を少し離れた店の奥側で、羽依里と蒼は眺めていた。

「あの子、汐ちゃんって言ったっけ？とつても可愛いわね……羽未ちゃんと同じくらいかしら？」

はしやぐ汐の様子を眺めながら、蒼がニコニコと微笑む。

「んー……確か羽未より少し年下だったと思う」

「そっか……あたしも、羽未ちゃんや汐ちゃんみたいな子供が欲しいわねえ」

「蒼なら美人だからその気になれば引く手あまただと思っただけだな」

その言葉に、蒼は少し顔を赤くする。

「えっ、ちよっ、だめよ……いくらあたしが魅力的だからって、あなたにはしろはってものが」

「おーい、誰も俺が相手になるとは言っていないだろうが」

「何よ、ノリが悪いわね……もう少し冗談に付き合いなさいよ」

手をチョップの形にして蒼の頭を軽く小突きながら羽依里が言うと、蒼も破顔して答える。

「ま、あんたが独り身なら悪くないとは思ったりしちやっただけど……」

「ん？なんか言ったか？」

「……あ、ああっ、いえ、別に何も言っていないわ！」

小声で呟いた事を聞きとがめられ、思わず慌てて首を振る蒼。

「いや、しろはは幸せ者だなあつて、ちよつとね」

「？」

蒼の言葉を受けて、まるで疑問符を頭の上に浮かべているような表情の羽依里。

そんな羽依里の表情を見て、少し困ったような笑みを浮かべて蒼は続ける。

「ま、どつちにしても、あたしには当分無理よ。藍の事があるもの」

「ああ……そうだったな」

明るく言う蒼とは対照的に、答える羽依里の表情は少し暗い。

「ここから、何あんたが複雑な表情してるのよ、そういうのはむしろ立場的にあたしがするものでしょうが」

「そりやそうだけどき」

「……あたしにしてみれば、藍が元気になってくれた事が何より嬉しいんだから」

そう言つて笑みを浮かべる蒼。

「藍ね……今、調子いい日は、店番したりもしてるの。昔じゃ考えられない快復ぶりよ」

「そうなのか……なら良かった」

「うん。だから藍の身体がもつと良くなるまでは、あたし自身の事より藍の事を優先してあげたいわ」

「そうか」

宙を見つめて嬉しそうに微笑む蒼の様子に、羽依里も笑顔を浮かべる。

「……でもさ、蒼？」

「なに？」

「お前今幾つだったっけ、そろそろ適齢期とかぶべし!？」

羽依里が何事か言い終える前に、いつの間にか削られたかき氷の山が羽依里の顔面に飛んでくる。

「あんたと同じ年ですうー！近所のおばちゃんみたいなのを言うなああ！」

「何をするんだいきなり!？」

「乙女の心をえぐろうとした罰よ！」

「乙女って……いえ、何でもありません」

何かを言おうとした羽依里だが、蒼にすごい形相で睨まれて思わず言葉を引つ返めて目をそらす。

「それに……ここのおばあちゃんも、もう歳でね。駄菓子屋を蒼ちやんに譲りたいって凄く頼まれちゃってね。あたしと一緒にになるなら、駄菓子屋と一緒にやってくれる人じゃないとね」

「蒼って、押しに弱いもんな」

「う、うるさいわね」

まだ顔に残っているかき氷の残骸を払いながら言う羽依里に、蒼は声を荒げる。

「でもまあ、そんなおばあちゃんの頼みを聞いてあげたいって思う辺り、面倒見がよくて、気が回って優しい、蒼らしいなとは思っけどな」

「え？あつ……そ、そうかしら……えっと、ありがとう……」

急に褒めるような物言いをする羽依里に、顔を赤らめて俯く蒼。

羽依里はそんな蒼の肩をポンツと叩く。びくつとする蒼。

「……蒼」

「あつ……は、羽依里……?？」

名前を呼ばれて、やや上気した顔を上げる蒼に、羽依里はにっこりと笑みを浮かべ。

「……そのちよろいとこ直さないと、いつか誰か悪いやつにだまされないかすごく心配」

「あんたねええええええ！」

蒼の絶叫と謎の轟音に、駄菓子屋を楽しんでいた岡崎家の三人が思わず振り返ると、そこには全力投球し終えた投手のような格好の蒼と、顔と上半身に大量のカキ氷用の氷を付けて倒れている羽依里の姿があった。

第九話く鳥白島の看板娘（3）

「ありがとうございますー！汐ちゃん、またいらっしやいねー！羽依里、あんたは今度覚えてなさい？」

「えつと……ま、また汐連れて遊びに来ますね」

「ふふふ、ありがとうございます」

「またくるー！」

「……ちよつとからかっただけなのに」

とてもいい笑顔で岡崎家の面々、特に汐に対しては笑みを深めて挨拶をしつつ、その表情のまま若干冷えたトーンで羽依里にも声を掛け見送る蒼。

そんな蒼の様子に、朋也は少したじろぎながら、渚はくすくすと笑いつつ言葉を返し、すっかり蒼にも慣れた感じの汐は、右手を上げて可愛らしく動きながら答える。一方羽依里はまだ少し肩に積もり残るかき氷を払いながら、苦笑いと共に愚痴をこぼす。

「羽依里さんと空門さん、仲良いんですね」

車に戻り羽依里の運転で次の目的地へ向かう途中、ふつと渚がそんな言葉を羽依里へ投げかける。

「そう見えますか？んー……そうですね、確かに、少なくとも俺は仲良いと思ってますよ。そもそもあいつが人怖じしない明るい性格ってのもありますけど」

運転しながら、少し考えた後にそう答える羽依里。

「思えば、最初の頃に俺がこの島に来た時、なんだかんだ世話を焼いてくれたのは、蒼ともう一人、のみきって呼ばれてるやつでしたね。蒼はその頃から駄菓子屋の看板娘としてやってて、もう一人ののみきつてやつは、島の少年団の取りまとめみたいな感じの役割をやってましたから」

昔を懐かしんでいる様子でしみじみと語る羽依里。楽しそうに懐古しながら語る彼の様子につられ、微笑を浮かべながら話に耳を傾ける岡崎家の三人。

「この島の方々は、温かい方が多いんですね」

「そうですね……だからこそ、俺はこの島に救われたんだと思います」
渚の言葉に深く頷き、奇しくも昨日車内で言った言葉を繰り返す羽依里。そんな羽依里の表情を見て何かを感じ取ったのか、朋也も何かを懐かしむような眼をして小さく頷く。

それぞれが思い思いに何事か思い出し、また考え、少しの間沈黙が降りた後、不意に朋也が羽依里の方へ向き直り口を開く。

「それにしても、羽依里さんと空門さんのやり取りはなんだか凄くかみ合っていましたよね。まるでコントか何かかと思ってしまうんですよ」

「あ、ああ……あれは大体いつものやり取りなんです、恥ずかしい所を見られてしまいましたね」

照れたような苦笑いを浮かべつつ、けれども満更でも無さそうな感じで答える羽依里。

「あいつはあんな感じで誰とでもすぐ仲良くなるし、裏表がない……って言うか、嘘が付けない性格って感じなんで、周りの皆も、あいつの事を嫌ってる人間の方が少ないですしね」

「うしおも、そらかどさん、すぎだよー?」

それまで外を眺めていて、まるで話に興味を持っていなかったかのような汐が、急に三人の方へ振り返って言う。

「空門さん、良い人でしたよね、しおちゃん」

「うんー」

渚に微笑みながら撫でられ、元気よく満面の笑みで返事をして頷く汐。

その様子を見て羽依里と朋也も思わず笑みを浮かべる。

「まあ、よく蒼とあんなやり取りしていると、夫婦漫才だーなんて面白い物に来てる子供達に冷やかされて、真っ赤になつて子供を追いかけまわしたりするくらい、蒼も子供っぽいところあるんですけどね?」

「そ、そうなんですか……意外と活発な方なんですね」

少し意地悪く笑って言う羽依里とは対照的に、さすがに同じような反応をするのは蒼に失礼だと思ったのか、苦笑し答える朋也。

「……多分、それは子供っぽいんじゃないかと、むしろ逆だと思っ
けどね……」

店での羽依里と蒼のやり取りや、蒼が羽依里を見る時の目や表情を
思い返しながら、渚は困ったような笑みを浮かべつつ、男性二人には
聴こえないような小さな声のトーンで、ぽつりと呟くのがあった。